様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：９９９９９
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：２０Ｈ００６９１

研究課題名　　古墳時代の金属製象嵌製品の製作技法の解明と保存修復のための診断技術の確立

研究代表者
杉崎　佐保惠（Sugizaki, Sahoe）

福島県立博物館・県立博物館学芸員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　480,000円

研究成果の概要：金属製象嵌製品の製作技法や保存修復について総合的に検討するため、考古遺物と古墳の両方を実見できることを条件とし、全国の"風土記の丘"より調査対象を絞り込み、西日本より岡田山１号墳及び銀錯銘銀装円頭大刀（島根県松江市）、東日本より稲荷山古墳及び金錯銘鉄剣（千葉県行田市）を調査対象とした。展示保存などについて施設管理者よりヒアリング調査を行った。
比較対象として、奈良国立博物館所蔵の金銅製品３件（奈良県五条猫塚古墳出土・珠城山三号墳出土）について熟覧を行い、荒神谷遺跡（島根県出雲市）の出土青銅製品を常設展示する島根県立古代出雲歴史博物館及び荒神谷遺跡公園の施設管理者よりヒアリング調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
“風土記の丘”は野外展示施設という役割を担うため、古墳（出土場所）に隣接する展示施設において考古遺物（考古資料）を常設展示する必要が生じる。金属製象嵌製品は、材質及び製作技法の双方の観点より、非常にデリケートであるため、適切な保存処理を行った上で、安定的な展示環境を維持できるように、窒素ガス（不活性ガス）を展示ケース内へ導入する仕組みを実現することにより、遺物の展示保存が可能となる。訪問によるヒアリング調査を行うことにより取得した情報を比較表へ整理した点が本研究の成果である。

研究分野：保存科学

キーワード：象嵌製品　風土記の丘　青銅製品　金銅製品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

金属製象嵌製品の製作技法や保存修復について総合的に検討するために、考古遺物と出土場所（古墳）の両方を実見できることを条件設定し、全国の"風土記の丘"より調査対象を絞り込んだ。調査対象としたのは、西日本より岡田山１号墳及び銀錯銘銀装円頭大刀（島根県松江市）、東日本より稲荷山古墳及び金錯銘鉄剣（千葉県行田市）である。訪問により、施設管理者より展示保存などについてヒアリング調査を行った。

比較対象として、材質及び製作技法が異なる金属製品について、保管方法等について調査を行った。奈良国立博物館がインターネット上で公表している収蔵品データベースより、修理前及び修理後の画像を取得することが可能な考古資料のうち金銅製品に限定し、蒙古鉢形眉庇付冑（奈良県五条猫塚古墳出土）、双鳳文杏葉（奈良県珠城山三号墳出土）、忍冬唐草文鏡板（奈良県珠城山第三号墳出土）の３件について熟覧を行った。青銅製品については、荒神谷遺跡（島根県出雲市※旧斐川町）より大量に出土しており、令和３年度末に再修理報告書が公表されている。この資料群は、加茂岩倉遺跡（島根県雲南市）より出土した多数の銅鐸（青銅製品）とともに島根県立古代出雲歴史博物館に常設展示されているため、施設管理者よりヒアリング調査を行った。令和４年度末には、荒神谷遺跡公園の遊歩道等の修理工事が行われたため、施設管理者より維持管理に関するヒアリング調査を行った。

２．研究成果

“風土記の丘”は野外展示施設という役割を担うため、古墳（出土場所）に隣接する展示施設において考古遺物（考古資料）を常設展示する必要が生じる。金属製象嵌製品は、適切な保存処理を行った上で、展示環境を維持するために、窒素ガス（不活性ガス）を展示ケース内へ導入する仕組みを整えて展示保存が可能となる。ヒアリング調査により取得した情報を比較表へ整理した点が本研究の成果である。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 杉崎佐保惠	４．巻 767
２．論文標題 考古アカデミックレポート 金銅製品の保存について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 48-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名